

BONDAGE NIGHTS

ボ
ン
デ
ー
ジ
ナ
イ
ツ



— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

■ エクシア編
■ イネス編

ボンデージナイツ

エクシア編

イネス編

執筆者: jack-raven

発行サークル: JR44

目次

エクス
シア
編

イネス
編

30 02

01…エクシア

それは荷物の運搬中に車で荒野を突っ切っていた時の話。

あたしはスーツケース程の荷物を後部座席に置き、一人で停止中のロドス艦へ向かっていた。

しかし道中に煙の上だったバイクと人影が見える……。

アクセルを緩め速度を落としてつつ近づくとそれが誰だか分かった。

停車し窓を開け声をかける。

「ラップランド？」

こんな所でなにやってんの？」

長い銀髪を風になびかせた彼女が答える。

「やあ、エクシア、暇潰しに走って居たんだ……どうにも艦内が退屈だね。

なにも考えず転がしていたら突然バツン！ て、エンジンから煙が上がっちゃったんだ

……」

エクシア編

彼女は仰々しく説明をし、あたしの瞳を覗く。

まるで反応を待っている様に。

「じゃあ乗ってく？ それとも迎えを頼む？」

「そうだね……外は飽きたよ。」

お願いできるかな……？」

「オッケー！ じゃ助手席に座ってー」

それを聞いたラップランドは優しい笑みを浮かべ隣に座った。

パーキングブレーキをリリースして走り出す。

彼女は何か考え事をしている様で窓の外を見ていた。

5百メートルほど進んだ所で失念していた事を吐く。

「あ、さっきのバイクどうすんの？」

「……ああ、あれならもういらないよ。」

そこらへんのチンピラが持ってたヤツだからね。

あいつらここらへんで待ち伏せでもしたかったらしくて隠れてたんだ。

それで気に入らないから追っ払って色々貰ったんだ……」

「へえー、流石だね。」

でもどうしてこんな所に？」

……しばらく待ったが返事が返ってこない。

横を向くとラップランドが真剣な表情で前を見据えて居た。

「止まるんだ……」

彼女の声を聞きそつとアクセルを抜いて速度を落とし、ブレーキを踏む。

「どうした？」

「……さっきの奴らここらへんで穴掘ってたんだ、一応確認してくるよ……」

サプライズはイヤだろう？」

「もちろん！ 愉快的サプライズなら大歓迎だけどね！」

「ふふ……キミは来た道を見張ってて」

「オッケーオッケー！」

彼女は微笑むと降車し路肩に向かって歩む。

その素振りは何処か楽しそうだった。

「まったく……何考えてるかわかないなー」

そうつぶやき車から降りる。

……テキサスはラップランドから逃れようとしてるけど嫌ってはいない様に見える。
きつと二人の縁は二人にとって無くてはならない物なのだろう。

お互いの深い部分が、あたしの知らない深い部分が絡み合つててどんな形であれ依存し合つて影響しあつてテキサスとラップランドを作つてる。

それが縁つてヤツだとあたしは思う。

一回深く繋がつたら失わない失えない永久の物だと想う。

……なんか妬いちやうなあ。

そうしてしばらく見張りを続けていたけど何一つとして異常が無い……じゃラップランドの考えすぎだったのかな？

少し肩の力を抜いて銃を下ろす……。

その時、手首がガシッと掴まれ背中に腕が押し付けられる！

っ!?

振り返るとその正体は楽しげに笑う銀髪の少女、ラップランドだった……。

「ちよつ！ なにすんのさ!!」

あたしがそう叫ぶが彼女は眉一つ動かさずに、黙々と何かをあたしの右手に被せてい

る。

もがき逃れようとするも彼女の華奢な姿からは想像出来ない力強さに阻まれて無意味だった……。

彼女の身体に密着する様な、抱きしめられる様な状態でただ身動きが取れなかった。

「このッ！……離れてよヘンタイ！」

彼女があたしの左腕を掴み、右腕が離される。

すると右手にミトンの様なものが被さっており、指が封じられている。

それはベルトと南京錠で固定されており、噛んで引き剥がそうとするもびくともせず革の味が染みただけだった。

そしてそれは右手にもそれが着けられている。

これ……詰んじやった？

編シアエク
仮に足元の銃を拾おうとしても引き金を引く事もままならず、逃げようとしても車のハンドルも握れない。

この荒野で助けてくれる人も居ない。

「あはは……ずいぶんな事してくれるじゃん……」

「どうだい？　気に入ってくれたかな？」

「ごあいにく様！　そうゆう趣味はないよっ」

腰を引いて顔目掛けてアッパ―を繰り出すが受け止められる。

彼女は楽しそうな目つきをしていた。

「こんな状態じゃ平手打ちなんか出来ないから拳で申し訳ないね！」

あたしはそう叫び手を振りほどいて蹴りを混ぜたバク転を披露するが本来彼女の顔に食い込むはずのつま先は寸での所で空を裂いた。

目にも留まらぬ速さで避けた彼女に対し、手で地面を支え今一度蹴りを繰り出すが踵が腕に食い込んだだけで受け止められてしまった……。

彼女は足を腕で組むとそれを引つ張つてあたしを地面に倒す。

もがいて立とうとするも腰にのし掛かられ、態勢を変えられずに足を押さえつけられてしまう。

彼女が枷を足首に嵌めるのに大して苦労しなかった……。

……両足を束ねられ両手も使えない、やばい。

「ねえ……もう満足したでしょ？　許してくれない？」

その言葉を聞いたラップランドは、こちらに振り向きぐつと近づいてあたしの瞳を覗き込む。

鼻同士が擦れあいそうな程の距離で見つめられ一瞬言葉を失う。

「うーん、まだ満足出来てないね、キミはどう？」

「……もう二度とアップルパイ焼いてやらない」

それを聞いたラップランドは嬉しそう、照れるように笑いあたしの頭を撫でた。

「じゃあこう考えてごらん？」

ボクはテキサスの気を引きたいだけなんだ、こうやってお友達に意地悪してね。

協力してくれたお礼にキミが気を引きたい相手を連れて来てあげるよ、どうだい？」

「信用できない……」

「傷つくなあ……じゃあその可愛らしい口を塞いであげるよ」

彼女が私の頬を撫で親指を口に突っ込んで口内を愛撫する。

阻もうとする舌を押し分け、指の味を教える様に親指を舌に押し付けられた。

……少し苦くてしょっぱい。

不思議な、非日常的な状況に啞然として、身動きが取れずラップランドに良い様にさ

れてる。

更に彼女は指を奥へ進めていき、しなやかな指が喉を突く。

嘔吐反射で私がむせていると彼女は楽しそうな表情をしながら指を引つ込めた。

流石に本気で嫌だと感じた私はやりたくもない懇願を始めた。

「はあ……はあ……もういいでしょ？ やめにして！」

「さあてどうしよう？」

「……あんまし調子こいてるとあたしの相方が容赦しなくなるよ？」

その問いかけに、最後の抵抗に対しラップランドは無邪気な笑みを浮かべながら返す。

「それが望みなのにやめると思う？」

それに、なんにも抵抗ができないキミが言葉で必死に訴えても無意味だよ。

……だからさ、抵抗してごらん？」

私は腕を力ませ彼女を突き飛ばそうと試みたがいなされ、口にハンカチを当てがわれて異臭と共に意識が飛んだ。

目が覚める。

砂漠の真ん中、岩山の上に私は身を潜めている。

岩の影から目的地を見下し、彼らが予想通りに動いた事を確認して動く。

隠れつつ進みその中へ、彼らが使っている洞窟に入った。

ここを拠点としている彼らはロドスへの攻撃を企てており、私が調査に赴いたのだ。

彼らは正体も戦力も判明しておらず、未知のアーツを操るサルカズが合流している事しか分からない。

そのサルカズはサルカズ拘束術師と呼ばれており全くもって不気味極まる。

さて……洞窟の入り口付近にはめばしい物はない、内部へ進んで調査を続けられない。

……人氣を避けながら暫く進んで部屋や物置を漁り、幾つかの情報を手に入れ彼らの武器や補給路を特定した。

だが更なる情報が欲しい。

ドアを開け司令部に入る、すると幾つかの通信端末があつた。

その机に広がっている紙をめくりめばしい情報を探して記憶する。

さらに中央の机の書類を漁っている時、部屋の外で音がする……！

「たく、誰だよ鍵開けっ放しにした奴は……」

「さあ？ 知らねえ」

「……怒られるのは俺なんだぞお」

6人ほどのサルカズが入室して来て私はとつさに隠れた。

手ごろな物陰が近くに無かったから机の下に……。

真上の電灯が影になって隠れられているが……。

とにかくやり過ごすしかない。

彼らは仕事に取り掛かっている様だ、いつまでも隠れてる訳には行かないから人数が減った際に始末して去るか……。

不意にドアが開く音がして注視する。

……そこには奇妙なサルカズが居た。

全身に拘束具を纏っており不気味でまるでホラー映画の殺人鬼みたいだ。

ゴムで出来たローブが艶を出しており本当に不気味だ。

彼らが色々と作戦の話し合いをしてる時、机から垂れて姿を半分隠していた地図が不

意に退かされる……。

拘束術師と目が合う……！

咄嗟に飛び出して地図を手にした彼を不意打ちで殺そうとする！

しかし唐突に足が地から離れる。

どさっ！ と彼らの目の前に転がり啞然としたサルカズ達の中央に座り込んでしま
う。

っ！ 一体何が!?

確かめて見ると足につま先立ち専用のヒールが履かされている。

サルカズ拘束術師がアーツを構えている……あいつのアーツか!?

立ち上がり戦おうとするも膝が震えてまともに戦えない！

拘束術師が再びアーツを放つと首輪が転送されてリードを引っ張られて地面に倒れて
しまう。

手で地面を支えたが周りのサルカズ達に腕を引っ張られ、ナイフを奪われて取り押さ
えられる……。

編集スネイ
私は術師を睨みつけて文句を伝える。